

聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

聖霊体験は身近なところにある。それを伝えよう



聖霊降臨の主日を迎えました。この祭日が終わると、教会の暦は復活節から年間の季節に移ります。「アレルヤの祈り」も聖霊降臨翌日から「お告げの祈り」に戻ります。「お告げの祈り」と「アレルヤの祈り」の切り替えは、幼い頃母親がていねいに教えてくれました。中学までしか卒業していない母ですが、今も人生の教師でいてくれます。有難いことです。

「お告げの祈り」「アレルヤの祈り」でも気づかれた方がおられると思いますが、聖霊降臨の出来事もご昇天の出来事同様に、復活したイエスの結びつきを大切に考えて黙想するのが良いと思います。聖霊降臨の出来事は、イエスが教えておいたことをことごとく理解させ、悟らせる体験でした。

第一朗読で、あらゆる国からエルサレムに帰って来ていた信心深いユダヤ人たちは、地方出身の田舎者に過ぎない弟子たちが神の偉大な業を語っているのを聞いて、あっけにとられてしまったとあります。聖霊がとどまっていた弟子たちは、神の国の福音を、単なる読み聞かせとか受け売りのように語ったのではなく、「イエス・キリストの身分において」大胆に語りました。「霊」が語らせるままに語ったのです。

「霊」が語らせるままに語った。それは止まらないおしゃべりや、いつまでも続く世間話ではありません。弟子たちは、三年間共にいたイエス・キリストの教えを、聖霊の導きによって深く悟り、正確に語り始めたのです。聖霊は、イエスが弟子たちのそばにいたときと同じように、教え導いてくれるのです。

聖霊降臨の出来事を、中田神父の体験から「こうではないかな」と思う時があります。それは、一度にたくさんの方ができたときです。たとえば、受難の主日の一週間、司祭たちはいくつもの説教を準備しなければなりません。受難の主日・聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭・復活の主日（日中）と、一週間の合計で五つの説教を準備しなければならないのです。

すべて朗読が違っていけば、すべて違う内容を用意する必要があります。生涯に一度だけ、一週間に五回の説教を用意するものではありません。毎年、たぶん50年くらい用意しなければならないのです。50年分、材料がどこかにあれば良いですが、おそらくそんなものはどこにもないでしょう。この、聖なる一週間の準備を、すべての司祭がかろうじてできているのは、私は聖霊の働き、聖霊降臨の働きだと思っています。

芸術家や作家、画家や漫画家、こうした人が言うセリフがあります。「作品が降りてきた」と。中田神父も、そういう体験をしてきました。説教が降りてくることがあるのです。それは突然やって来て、まごまごしていたら去って行きます。突然降りてくる説教を、ただ私は書き留める。そんな体験がまれにあるのです。

もちろん、そんなにめったに起こるわけではありません。多くの説教は悪戦苦闘して、ばた狂いながら用意したものです。話しながら「納得はしていないのだけれども」と思いながら話していることも、実際にはあります。

それでも、聖霊降臨の恵みは十分信じるに値します。私たちは聖霊の照らしによって、自分では解決できなかったことを解決し、理解できなかったことを理解することがあるのです。それは間違いなく、聖霊が注がれて、あなたを助けてくれたのです。

口でどれだけ説明を受けても理解できなかったことが、ある日理解できるようになる。父親になる前は父親の話が理解できませんでした。母親になる前は母親の言い聞かせが理解できませんでした。いざ父親・母親になって、父母が教えてくれたことが理解できるようになる。そこには、聖霊の働きがあるのです。父親母親になれば誰でも理解できるようになる。そんなものではないのです。

私たちは、聖霊降臨を難しく考えていたかも知れません。復活したイエスの語る言葉がしみじみと分かるようになった。私たちはこのような形で、聖霊降臨の体験をしているのです。選ばれた人の、特殊な体験ではないということです。

聖霊を受けた弟子たちはあちこちで宣教するようになりました。私たちは堅信の秘跡によってすでに聖霊を受けた人ですから、宣教の務めは私たちにも向けられているのです。「いつかあなたが父親母親になったときに分かるよ。そのとき聖霊が働いて、理解させてくれるよ。」私たちの宣教は、こんな声かけから始まるのではないのでしょうか。

三位一体の主日(ヨハネ 3:16-18)